はぐくむ2

自閉の
世界をひらく
母と子の
記録

森正子著

小学校編

ぶどう社

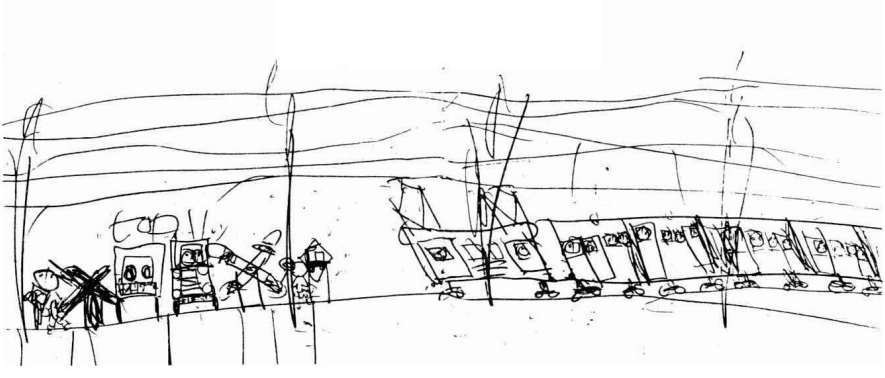
はぐくむ2

自閉の
世界をひ、
母と子の
記録

森正子著

小学校編

ぶどう社



はぐくむ　自閉の世界をひらく母と子の記録
②小学校編　定価一六〇〇円

一九八三年十一月五日　初版印刷
一九八三年十一月十五日　初版発行

著者　森　正子（もり　まさこ）
発行者　市毛研一郎
発行所　（株）ぶどう社
東京都千代田区神田神保町二―三六
電話　〇三―二三四―一四五〇（代）
振替　東京八―四二七九六

編集・校正／市毛研一郎・今井真志
用紙／中庄　印刷／KMS　製本／東京美術紙工
MASAKO MORI © Printed in JAPAN

序文　かかわりあい、わかりあって生きる
さらなる力強い発達を願って

西村　章次（埼玉大学助教授）

カズオ君の感受性と行動、知識欲は、青年期のそれに近づきつつある。いくつかの発達的なもつれを残しつつも……。

カズオ君と私の出合いは、小学校一年生の彼を学校に訪ねたときに始まる。そのころ、森さんは大学の発達ゼミで学び始めた。それ以来の長いおつきあいになる。

この出合いの前の彼について、前著『はぐくむ』から若干振り返ってみよう。二歳前にも障害が見られたらしいが、多動等を含む症状が二歳九ヵ月ごろ顕在化した。しかし、本書の第一章でも、汚れたパンツを脱がせるとき、カズオ君がお母さんの肩にもたれた事実から、森さんが彼の心の確かさに気づいたようすが描かれている（一九頁）が、三歳九ヵ月のころ誕生した末娘のみずえちゃんをまっ

たく無視する態度でみずえちゃんを意識していたことに気づき、森さんは「カズオから出発する」ことを決意する。豊かな子育ての実践がそこから始まる。四歳を二〇日前にして、夕日の中、佐保ちゃんと一緒にカズオ君を乳母車でゆすっていたとき、失われたことばがよみがえる……「ヒコーキ」。

さくらんぼ保育園に入り、豊かな集団保育のもとで、カズオ君は発達する。退行現象が見られる中、小学校に入学する。

一年生のときの元旦、カズオ君がパンツを便所に捨てる。汲み取り口の蓋を開けると、パンツ、ズボン、スリッパなどが思いもよらずたくさん出てくる。それまで叩いたこともない森さんは、カズオ君にパンツをつきつけ、ピシャッ。

長女の志保ちゃんがとんできて、カズオ君を後手にかばいながら、

「ママが怒るから、カズオ君が忍者の世界に行っちまうんだ！」と抗議する。

カズオ君は頬をおさえながら、

「ボクは、人間だから。忍者の世界へ行きたくないから」と、大粒の涙をポロポロ流した。

本書『はぐくむ―2』は、その後のカズオ君の発達を、プロローグにあるように情意や感情、情緒という面に視点を当てて、そして教科学習や学級集団でのとりくみにもふれながら、小学校高学年期を中心に卒業まで追ったものである。

日本児童精神医学会での討論や最近アメリカから出されたDSM―Ⅲでも、自閉症状を発達症状論的におさえようとする動向にあるが、私は先般、自閉症を主訴とした一〇三名の診断結果を整理した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

（『児童精神医学とその近接領域』二一巻四号、一九八〇年）。その約八割が自閉的傾向と同じく、あるいはそれ以上に発達的なつまずきを多く根拠とする自己対象反応（行動が現象的に自己に向かう傾向）が強いタイプであった。経過報告からは、おとなとの情動関係を基盤に、手を使った活動、遊びなどの発現に伴って、自己対象反応や自閉的傾向が軽減したケースが多かった。ことばの発現も少なくなかった。さらに、このタイプから次のタイプに移行する場合もあることに最近気づいている。次のタイプというのは、もっぱら自閉的な傾向が目立つ一割の子どもたちのことである（残る一割のタイプについては省略）。後者については、集団的な活動のつまずきを中心に、平衡感覚や利き手・逆利き手の操作、描く・作る活動で発達的なつまずきが顕著に見られ、課題的には二歳前を課題とするものと四歳後を課題とするものとに分かれた。四歳後を課題とするものについては、おとなの援助で集団内接をはかることが必要と思われた。

障害をもつ子どもたちが参加する「はぐくむ会」の合宿で森さんは、他の親たちに、「カズオのような子どもには感情交流をはかっていくことが大切」と言っている。内接への援助とは、感情交流をはかっていくようなことを言う。カズオ君は後者のタイプである。

学校教育、集団を否定したところからは、子どもの豊かな発達は望めない。すでにことばの世界に入っているカズオ君にとっては、ことばを通して、おとなと、そして仲間と、事実の発見等を通して感動を分かちあい、そのような活動をふとらせつつ、一歩先の課題として、感動を共有し、認識の力——分析し、総合し、そして応用する力——を高めあっていくような生活・労働・学習活動を、現下の課題に取り込み発達させていくことが、展開上必要とされてくる。

全面的に仲間と学びあい切れない弱さを一部の教科に残しつつも、カズオ君は小学五年生から六年生にかけて、家庭と学校の、そして集団の支えの中で、その世界に入ってきた。生活年齢が持つほこりや発達的な広がりも見え始めた。

すべての人生がそうであるように、カズオ君の将来にもまだいくつもの難関があろう。カズオ君のさらなる力強い発達を願って序としたい。

人間科学は人の事実に学んで成り立つ。理論書も大事であるが、親、学生、人の問題を研究する方がたに、私はまず、前著『はぐくむ』を読まれるようお勧めしてきた。発展的続編である本書『はぐくむ—2』が、前著にも増して広く読まれんことを期待したい。

はぐくむ 2 ―― 目次

(C12)

五月十五日　天気　木曜

起床 六時三十分　就寝 九時　分

備考

ハラ日学校から帰ったらママ(お母さん)がいました。いつもはおっとめしているので家にいませんだからハラ日はいるのです。うれしかったのです。ママ(お母さん)は少し病気でした。ぼくは洗たく物をおろすお手伝いをしました。おやつを食べてねんねをしました。外はかえるが鳴いているのです。明日は雨になりそうです。

日記（小学五年生）

序文……西村　章次　1
プロローグ……9
第一章　幼児期の育ちと遊び
1　母親としての再出発……16
2　遊びつつ育つ……28
3　遊びにくさと、遊びの中で育った力……54
第二章　小学校低学年期の育ち
1　普通学級の中で……74
2　小学三年の試練と成長……84
3　わが家の一日……98
4　遊びの中から情意を育てる……115
5　ベンの手術……129
6　教科学習の取り組み……142

第三章　カズオと先生と母親
1　一学期……166
2　二学期……222
3　三学期……247
第四章　思春期前期へ
1　自我の成長……264
2　巣だちの朝……300
エピローグ……309
あとがき……317

ぼくは森一生です。

ぼくの生年月日は昭和43年7月31日です。

ぼくのお父さんの名前は森しげきです。

ぼくのお母さんの名前は森まさ子です。

ぼくのおばあちゃんの名前は中村かずえです。

ぼくのお姉ちゃんの名前は森しほです。

ぼくの妹の名前は森さほと森みずえです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

プロローグ

「ぼくを苦しくする……」

カズオが六年生になった初夏の夜のことだった。

彼と私は、ひっそりとした大学の構内を歩いていた。月の光が校舎の影をくっきりとコンクリートの地面に落としている。その明と暗の際を、几帳面に踏んで歩いていく彼の足どりは、緊張から解き放たれた喜びのためか、いつもより軽々としているようだった。

教時間前にここを通った時、彼は両手で両耳を押さえ、身を縮めて歩いていた。ここへは何度もきていて慣れているはずなのに、この日は列車からホームへ降りたとたん、耳覆いを始めた。バスに乗っても吊り皮につかまろうともせず、懸命に耳を押さえているので、ブレーキがかかる度に、隣の人の足を踏みはしないか、子どもを押しつぶしはしないかと、はらはらさせられ通しだった。耳を覆いながら何かブツブツつぶやいている姿はいやでも人目をひいて、あからさまな奇異の目が集中した。

その上、この日の発達相談は前のお子さんたちの話が長びいたために、順番がだんだんずれて、外が暗くなる頃から始まった。待ちくたびれた彼は大あくびを連発して、「ぼくの頭の中の運転手が眠

くなったんだよ」という理由で、何を聞かれても、「わかりません」「知りません」で通した。特別に時間を割いてもらって相談にきたのだし、せめてふだん通りに応じて欲しいと願っている親のささやかな期待すら、この日はことごとく裏切られていた。

この上帰りみちも、彼の執拗な耳覆いと二時間以上もつき合わされなければならないかと思うと、疲れの中にズブズブのめりこんでいくように感じながら、私は彼の後を歩いていた。

図書館の前を通って、木立ちが舗道に暗がりをつくっている所までくると、ふと彼は立ち止った。別に私の方を振り向くわけでもなく、いつもの調子でひとり言をつぶやくように話しかけてきた。

「夜は、気持いいねえ」

「そうね。でも、どうして?」

「……ぼくを苦しくする人の声が、しないから」

彼のこの一言は、私の疲れを切り裂いた。その裂け目からじわじわと侵み出してくるものに気をとられて、私は多分、虚ろな声で「そうなの」と返事をしていたろうと思う。そのものの持つ冷酷な非情さに、私はできれば目をそむけたかった。耳を覆いたかった。それを、わかりたくなかった……。

低くとどろくような音、バイクや雷や大太鼓の音などを、彼は幼い頃から恐れていた。小さい頃はただ泣きわめくだけだったので、何を怖がっているのか見当がつかなかったが、今はもう、本人も私たちも慣れっこになっている。そういう音が遠くから聞こえ始めると、彼はじっと耐える姿勢に入り、私たちは嵐が通り過ぎるのを待って話しかける。こんな生活を続けてきて、今は、よほどひどい

音か、突然そんな音に襲われない限りは、彼はもう苦しさに十分耐えぬけるだけの力を持っている。

そうしたおどろおどろしい音が、どれほど彼を苦しめていたかをずっと見続けてきてはいたが、その彼を苦しくしていた音の中に、人間の発する声が入っていようとは、全く思ってもみなかった。もしそれが真実なら、その意味するものは、私にとってはあまりにも熾烈にすぎる。

人間の中には、母親である私も入っているはずではないか……。

いつかテレビの画面に、母親の声に微妙に反応を起している胎児の様子が映されているのを見たことがある。生後数時間の新生児の動きをグラフにして、母親の声、他人の声、機械音に対する反応との違いが、正確に測られていた。新生児がこれらの音を聞き分けていることに驚いたことを覚えている。これが母と子の結びつきの始まりかと。

木立ちの暗がりをぬけると、正門のむこうに車の流れる街の活気があった。裂け目から執拗に流れ出すものを、私の思いすごしだと押しとどめて、カズオを連れてこの街の活気の中に分け入っていくために、私は目をつぶり、深呼吸をした。それは、いつもする、私のたじろぎからの立ち直り法だったが、この時は何度くり返しても、私の足は前へ進もうとはしなかった。

自閉の世界から

カズオは、言葉を獲得した。彼の語る不思議な世界を、私たちはこんな形で少しずつ突きつけられて、驚かされもし、胸をしめつけられもしている。

ここに至るまでの歩みは、彼にも私たちにも決して平坦ではなかった。時には耳を押さえながら、目を覆いながら、彼を苦しくする外の世界を乗り越えていこうとするエネルギーが、いつもいつも正しい方向に向かうわけでもなかった。

新しい環境への抵抗は執拗だった。ようやく慣れたかと思われる頃、神経症状めいたものに悩まされることが多かった。たちまち胸板を濡らしてしまうほどの唾液をどう止めるか、途方にくれて行き詰まった時、捨て身の体当りが効を奏して、パッタリと唾液が止ったこともあった。

あまり風邪をひくことはなかったが、たまたま四〇度近い熱になると、突然頭脳の歯車が正常に回り始めたかのように、ものの通りがよくなって、普通の抑揚やアクセントではっきりと話し始めたことがあった。それはかえって、私たちを不安にしたくらいだった。

遊園地の入口で寝そべったり、デパートで迷子になったり、他人の家にズカズカ上がって点検したりして、親をうろたえさせた。たった今使っていた鋏を探すことができなくてパニックを起した。ネジまわし一本でカメラ、時計、ラジカセ、掃除機などをバラバラにして、次の獲物を探し歩いた。

その上、外に出すことは何もかも苦手だった。言葉を出すことから鼻汁をかむことまで。大便は、今でも新しい環境だと三日でも五日でもがまんする。汗をほとんどかかないことも不思議だ。

スベスベした面にある出っぱりが気になり、貼りつけてあるものは皆ひきちぎった。万年筆のキャップの金属製のフック、包帯、サロンパス、ズボンの打ちつけポケットなどは、無事であったためしがない。ドアのノブやドアホンのボタンには、がまんがならないほど気になってとりつかれた。止めさせようとすると、興奮して飛び跳ね、鎮まるのに時間がかかった。

そのくせ人の気持に敏感で、相手に受け入れられているかいないかは、その人を一瞥しただけで感じとる、本能に近いものがあった。

わけのわからないままにも、こんな難しい子と暮らしながら、親というものは不思議に子どもとよりうまくつき合う方法を見出していく。

せめて私の言うことにうなずいてくれれば、いくらか心が伝わったらしいという手応えになるのに、今でもそれをしない。そんな時、うなずくまで待っていると日が暮れてしまうから、わかっているはずだと思って、さっさとやらせると、スタートで大なり小なり抵抗はするが、踏み出すとけっこうスムーズにいくことが、体験からわかってくる。

目や耳を通してよりも、雰囲気で真似を始めるところがあり、それにリズムを加えると一層伝わりやすくなることも手がかりになった。大きな声で叱咤するより、耳もとでささやく方が効果があることや、大人が猫なで声で呼びかけるより、子どもに呼びにいかせると抵抗に合わずにすむこともわかった。彼の好みや興味の向け方や、突飛なサインで人の関心をひく有様も、徐々に理解していった。

ある時、カズオは言った。

「ぼく、ガマンできない時は、背中のまん中から首の方へグウッと熱くなってくるんだよ。だから、そんな時は、アイスノンで背中を冷やしてね」

興奮してくるなとわかって、その熱さが首から上へ上(のぼ)ってしまうと、自分でも自分のすることを抑制できなくなるらしい。実際、

「早く！　アイスノン！」

と叫んで、私を冷蔵庫へ走らせたことが何度かあった。アイスノンを要求する前に、興奮しないように自分でブレーキをかけられればよいのだが、それはなかなかできないらしい。

こうした言葉のはしばしから、彼の世界を探ろうとしても、まだまだわからないことは多すぎる。

それは、河原の広がりを一挙に視界へ収めることへの恐れであったり、どうしてもバターを受けつけない舌であったり、時には車からたかだか三〇センチ下の地面へ足を踏み降ろすのに決死の覚悟が必要だったりする……。それほど外の世界への抵抗を引き起しているものは一体何なのか、彼はまだまだその理由は語れないし、私たちの推測も及ばない。

私たちがごく普通に何気なく生きている世界に、彼らが共に住むことの中には、私たちに想像もつかないほどの酷しい闘いが、幼い時から強いられているのかもしれない。

それでも、程度の差こそあれ、例外なく彼らは人間を求めている。だからこそ必死に、いたいけな努力をしているにちがいない。その求め方があまりにひくついていて時間がかかり、風変りで、ひとりよがりなので、周囲の誤解を招いて「自閉」という名を着せられてしまってはいるが……。

この世に生を受けた瞬間から、その不幸な努力が始まるとしても、彼らはひととして確かに存在し、家族の中に位置づき、その調子はずれな行動のためにかえって特別に、家族の者たちや保育園や学校の中で、人びとの関心を集めてはぐくまれているように思う。

自らの殻の中で、自らのためにだけ燃焼させていたようなカズオの意識や関心が、家族や友だちや社会に向かうようになっていく過程を、自閉の子には育ちにくいといわれている、情意や感情、情緒という面に視点を当てて、彼が一個の人間として歩き始めてゆく足跡を追ってみたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c